

「平成21年度男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」について ～キックオフ！これからの10年～

5 パネルディスカッション 「チェンジ！チャレンジ！ 共同参画！－新たな時代・ 生き方に向けて－」

コーディネーターとしてシンクタンク・ソフィアバンク副代表の藤沢久美氏、パネリストとして有限会社オズ代表取締役の江崎貴久氏、株式会社ウイル代表取締役の奥山陸氏、そして、株式会社ニッセイ基礎研究所主任研究員の土堤内昭雄氏の3名をお迎えし、ご自身の活動の紹介が行われた後、活発な意見交換が行われました。



パネルディスカッション

藤沢 基本法制定から10年たったが、次の10年に向けて、私たちは何をすべきだろうか。そのロールモデルとなるであろう3名にきていただいた。まずは、みなさんの活動について紹介を。

江崎 三重県の鳥羽で、旅館の女将をしながら、「エコツアーガイド」というものを作っている。「エコツーリズム」とはお客様や住民も楽しみながら、地域にある自然や文化を大

事にして使っていこうという観光のこと。漁業と観光を結び、学校と連携するなど、多くの人に協力してもらい9年目を迎えた。地域に頼ったからこそ、地域に必要とされる存在となれた。

奥山 会社員時代は、ハードな毎日で、働き方を考え直すようになった。起業後、結婚・出産をしたが、それまでのペースでは働けなくなり、仕事が半減。大田区の小規模事業主向け融資制度に助けられた。そんな中、子育てと両立して仕事を続けようと考えたとき、地域に目を向けるようになり、93年に「大田ワーキングウーマンネットワーク」を設立した。さらに97年には、「大田女性企業家ネットワークTES（テス）」を立ち上げた。

土堤内 19年前に離婚し、2歳と3歳の息子を育てることになった。子育ては仕事にも大きな影響を与える。子育て中は膨大な家事を要領よくこなさなければならないため、タイムマネジメントの力が必要。また、子育ては何が起こるかわからないので、リスクマネジメントの力も求められる。やがて子育てを通じて、柔軟に物事を考え、社会の出来事をいろいろな角度から捉えられるようになった。

藤沢 江崎さん、観光業という男性中心の社会で苦労はなかったか。

江崎 23歳で東京からきて、つぶれた旅館を再建しに来たのが始まりだったので、「出る杭」とも思われ

なかっただし、期待もされず、気にされなかっただと思う。

新しいことを始める時、皆が私の味方だと思えばやりやすい。新しい一步を踏み出せるのは、おばちゃん達の励ましのおかげだ。

藤沢 奥山さんは、手に職があるので、起業もしやすかったのではないか。

奥山 働き方の選択肢として起業もあるなど。起業してからは大変だった。女性経営者は少なかったが、先輩の女性にはたくさん助けてもらった。誰も1人でやっていけるわけではない。今の私も夫がいなければやっていけない。夫婦で出張の予定を調整するなど、子どもを一人で置いていかないように気をつけている。

藤沢 3人とも、与えられた試練を乗り越えたという印象がある。与えられた試練だったからこそ、強くなれたのか。

土堤内 状況は変えられないこともあるし、それを受け入れてベスト・ソリューションを探すことが大切。また、子育てを当たり前のことではなく、素晴らしいことだと家族・社会が認め合うことが重要だ。

藤沢 地方では、男尊女卑の文化が根強そうだが、そのあたりは？

江崎 私もかつて、女性であるがゆえに「看板」のように扱われてきたように感じる。男性の中に一人女性がいても話を聞いてもらえないかった。しかし、それは実績がなかった

ためであって、今は話を聞いてくれる人がたくさんいる。やはり積み重ねが大切だ。

藤沢 基本法制定以前より活躍してきた奥山さんから見て、この10年で社会は変わったか。これからどうしたいと思うか。

奥山 自分にとって、仕事は食事のようなものだ。大田区は圧倒的な男性社会で、女性としては数が少ないのが難点だ。政策的に女性を登用することやロールモデルを提示することも大切だ。ただ、政策は行政だけが担うのではなく、民の力で変えていくという意識が必要。次の世代に伝えるためには、ロジックをしっかりとさせて、きちんとした戦略が必要だ。

藤沢 土堤内さんは、女性の中で男性一人という経験をしたが、男性の中に一人いる女性のイメージはどうか。

土堤内 男性はマジョリティの経験しか持たない場合が多いが、マイノリティ体験をすることで、それまで見えなかつた差別、障壁に気がつく。男女共同参画を考えるとき、男性側は「やってあげる」という感覚ではなく、「一緒に歩く」という当事者意識を持つことが大切。

また、ワーク・ライフ・バランスは女性の問題として語られがちだが、男性にも重要なこと。人生は「好い加減」(グッド・ライフ・バランス)が大切であり、仕事だけではない人生を考えるべきだ。

藤沢 江崎さんも「好い加減」を考えてきたか。

江崎 最初は別々に始まったことでも、まったく関係がないことはなく、つながっている。自分の場合、ワークとライフの境目がなく、全て楽・嫌の区別しかない。「こうじやなきやダメ」というものはないと思う。働くことが楽しいと思えば良く、お母さんも生き生きし、周りも協力してくれるようになるだろう。

藤沢 「楽しく、一生懸命」が、いろいろな人たちのネットワークを生むのか。

江崎 一人ひとりの個性があるので、良いところをほめることが大切。難しいところをフォローすることを考えるのがチームワーク作りだと思う。

藤沢 男女共同参画の今後に向けてアドバイスを。

奥山 一人ひとりの個性を重んじる必要がある。マイノリティを恐れずに楽しむべきだ。人と違う自分を楽しんだり、そこから可能性を見つけること、また自分と違う人と一緒に何かをやっていく方法を考えることが大切だ。

江崎 自分の個性を大事にしてほしい。互いに個性を大事にしあうことがうまくいくコツだ。線を引かず、前に出て行くことだ。

土堤内 ワーク・ライフ・バランスの「ワーク」とは、賃金労働だけではなく、ボランティア活動、家事、育児も「ワーク」だ。これまででは、

主に男性がお金を稼ぐ「ワーク」、女性が貨幣価値に還元されないような「ワーク」を担ってきたが、これからは、男女ともに2つの「ワーク」のワーク・ライフ・バランスをとっていくことが、幸せになる一つの方法では。

藤沢 貨幣に換算しない労働にも報酬がある。貨幣でない報酬をどれだけ渡しあえるかが重要だ。相手を認め、個性を認める、一歩進んで感謝する、ほめあう。それでも社会に入れない弱者に対策をとっていくことだ。一人ひとりが動き始め、言葉を発し始めるだけでも新しい10年は変わってくるのでは。

6 パネル展示

ロビーでは、基本法制定10周年を記念して、各地域・団体、関係省庁等の男女共同参画推進の取組に関するパネル展示が行われました。



パネル展示